

# 原爆文学研究会報

## 第五六号

原爆文学研究会 二〇一八年一〇月

鳥のゆくへ

かつて私は長崎で平和祈念式典の舞台裏をかいま見たことがあった。舞台裏と言っても、大したことは知らない。私は式典の運営に深く関わったことはないし、それについて特別な調査をしたこともない。ただ、松尾直美さんによる前号の巻頭エッセイを読み、筆を執らずにいられなくなつた。ここに私の個人的な体験を記すことをお許し願いたい。

今から二十数年前、平和記念式典のテントを設営・撤去するアルバイトをしたことがある。このテントは平和祈念像前の広場に立てる巨大なもので、高さ十数メートルある支柱を何本も大型クレーンで吊り上げて立てるのである。当時、よくアルバイトをしていた私は、大学の厚生課の掲示板でこの仕事を見つけたのだった。たまたま今も私の手もとに残っている厚生課発行の「アルバイト手帳」を確認すると、雇い主は長崎県テントシート組合、日給は七五〇〇円と書いてある。

八月四日の午前九時、集合場所である平和公園へ行くと、ヘルメットとサングラスを手渡された。なぜ、サングラス？と訝しんでいたら、これから天幕をつなぎ合わせる作業をするので、必ずサングラスを掛けるように、また、飲み物をたくさん用意しているので、こまめに水分補給をするように、という注意を受けた。サングラスを掛けたわれわれは、平和公園に突然現れた地底人のようだった。作業の手順は次の通りである。まず、組み立て式になつている支柱を並べて、それをボルトでつなぐ。次に、天幕のパーツを広げ、紐で編んで組み合わせる。最後に天幕と支柱の頭をクレーンで吊り上げてワイヤーで固定する。炎天下、滝のように汗を流しながらの作業である。白く、大きな天幕に紐を通すときには、サングラスをしていても目を細めずにはいられなかった。テント

立てが終わると、今度は数千脚の椅子並べが始まる。トラックの助手席に乗って方々の倉庫へパイプ椅子を取りに行き、それを監督者の指示に従って、整然とテントの下に並べた。こうして設営作業が完了した。

九日は早朝に平和公園に集まり、テント内の椅子の清掃と並べ直しをした。そして午後に行う撤去作業に備えて、平和祈念像の裏側で待機しき人、制服を着た中高生らしき人、その日のTシャツを着たどこかの団体らしき人、大きなバックパックを背負った旅行者らしき人、さまざま機材を持った報道関係者らしき人……式典が始まる前から多くの人々が公園を行き交っていた。その中に、大きなバスケットを長机に載せてパイプ椅子に腰かけているおじさんがいた。近くで見ると、かごの中には白い鳩がたくさん入っている。好奇心に駆られて思わず声をかけた。

「これ、もしかして、式典のときに飛ばす鳩ですか？」「そうだよ」「前から気になつてたんですけど、飛んでいったあと、鳩はどうなるんですか？」「帰巢本能のあるけんね。みんなちゃんと帰って来るとよ」「へえ、みんな。すごいですね」おじさんは腕組みをして満足げにうなずいた。

やがて式典が始まった。原爆死没者名奉安、献水、献花、黙禱。アナウンサーが平和祈念像の背中越しに聞こえてくる。そして平和宣言。長崎市長が十分近くかけて宣言を読み終えるとファンファーレが鳴り響き、おじさんがかごのふたを開ける。鳩たちは勢いよく夏の空へ羽ばたいてゆく。平和祈念像・平和宣言・鳩——見方によってはこの上なく型に嵌まった取り合わせではある。マンネリというか、つい某製薬会社のCMを連想してしまう。しかし、そのとき、平和祈念像の裏側から見た光景に私はいたく胸打たれた。おじさんも祈念像に負けないくらいたくまし

く見えた。表現とは、ただ新しければよいというものではない。たとえ型に嵌まったものでも人の心を打つことがある。そこが奥深く、一筋縄ではないところである。

前号の松尾さんのエッセイによると、〈約十年前〉〈平和祈念式典のりーサル〉で飛ばされた鳩が〈迷子〉になり〈タカにやられ〉て動けなくなっていたところを松尾さんが保護したのだという。そのとき〈被爆者でもある〉松尾さんのおばあさまは〈うちにも来てくれたとねえ〉と仰っていたのだという。私はこれを読んで「あのとこの鳩が……」としみみと感じ入らずにはいられなかった。もちろん個体としてはきつと別の鳩なのだろうが、私の中ではあのかごの中の一羽が平和祈念像の後ろから松尾さんのおばあさまのもとへ飛んでいったのだという思いが消えない。松尾さんが電話したという〈飼い主さん〉も、あのとくましいおじさんに違いないという思いが。

正直に白状すると、テント設営のアルバイトをしていた当時、私は「原爆文学」のげの字も知らなかった。長兄が持っていた『祭りの場』はたまたま読んでいたが、『黒い雨』すら読んでいなかった。もちろん二十数年後「原爆文学研究会報」なるものにこのようなエッセイを書くことになるとは想像もなかった。贗地底人にせにそんなこと分かるわけがない。時間は思わぬところへ私たちを運んでいくものである。（中野和典）

## 第五六回 原爆文学研究会報告

例年以上に集中豪雨や台風による被害が激しかった二〇一八年夏。七月二八日（土）、二九日（日）に神戸市センタープラザで予定されていた第五六回研究会もまた、台風の接近を考慮し、開催直前に二日目の中止が決定されました。二〇年におよぶ研究会の歴史で初めてのことでそうです。中尾麻伊香さんの発表「被ばくと奇形―原爆映画におけるその表現と科学」と、坂口博さん、村上克尚さん、加島正浩さんによる「原爆



文学」再読——吉本隆明『「反核」異論』を聞くことができなかったのは残念でしたが、一日のみの開催となった研究会は、悪天候にもかかわらず三七名の参加者が集まり、活気に満ちた内容となりました。

最初の発表は、新会員の池田清さんによる「広島市の戦災復興都市建設と「植民地都市計画」―近代（核）文明と日本国憲法―」。池田さんは都市計画を専門とされており、広島市の戦災復興都市計画が、戦前の「植民地都市計画」を引き継ぎ、被爆者を置き去りにして道路・建物・公園を優先するものであったことを指摘されました。「人間復興」とはかけ離れた、近代的な科学技術による「平和と繁栄」を求める復興計画は、現在の福島原発事故にも連続していく問題と言えるでしょう。

続いて、ワークショップ「炭鉱と原爆の記憶 ―文化運動・被爆朝鮮人・遺構から考える―」が行われました。

岡村幸宣の発表「一九五〇年代『原爆の凶展』と炭鉱文化運動」は、主に『民科ニュース』や『北海道原爆展ニュース』など、一九五一年秋から五二年冬にかけての北海道原爆展に関する資料を読みながら、炭鉱における文化運動と原爆のかかわりを考えるものでした。

奥村華子さんの発表「炭鉱と原爆をつなぐ―雑誌『辺境』を視座に―」は、井上光晴編集の雑誌『辺境』に掲載された平岡敬や朴壽南らの文章をもとにしながら、在日朝鮮人被爆者を通して「炭鉱」と「原爆」を併置する試みでした。

木村至聖さんの発表「遺構を通して考える〈炭鉱〉と〈原爆〉」は、「軍

艦島」などの遺構によって歴史を語り、記憶を継承することの可能性と困難を伝えました。「炭鉱」と「原爆」を短絡的に結びつけることはできないが、一見異なる遺構から喚起される「想像力」を、さらに「想像力」で架橋していくことは可能ではないか、という発言が印象的でした。

司会の楠田剛士さんは、ワークショップの冒頭で、「炭鉱」と「原爆」をつなぐキーワードとして、朝鮮人徴用工や朝鮮戦争特需、先住民、近代化の遺構という四つのテーマを提示し、会場からは多くの質疑や発言がありました。

しかし、今回のワークショップでは、決して十分に「炭鉱」と「原爆」の関係が明らかにされたわけではありません。むしろ、「炭鉱」と「原爆」がいかにつながらないかを感じた、という意見があるほどでした。それは、両者のつながりを〈不可視化〉されている現実が浮かび上がった、と言ひ換えることもできます。

日本近代のみならず、アジア周辺諸国との関係も含めて、〈不可視化〉された「炭鉱」と「原爆」の問題を読み解くには「想像力」の連鎖による架橋が重要であり、そうした視点から原爆文学（表現）を再考することの大切さを、あらためて感じました。

なお、今回中止になった中尾さんの発表と吉本隆明『「反核」異論』の再読は、次回、一月二十二日（土）、二十三日（日）に行われる第五七回原爆文学研究会に繰り越される予定です。

#### ◇ 研究発表

### 広島市の戦災復興都市建設と「植民地都市計画」——近代（核）文明と日本国憲法——

池田 清

報告は次の四つの問題を検証することでした。第一に、広島市の戦災



く、百メートル道路、平和公園、河岸緑地など近代都市のインフラ建設のための財源獲得にありました。それゆえこの法は、貧しい戦争被災者や被爆者の「生命・身体、くらし、こころ」を救済することを目的としていなかったのです。近代は、未来にある目的のために、現在の生を手段化（抑圧、犠牲）するシステムです（見田宗介）。広島市の戦災復興は、未来の近代都市建設のために、当時、苦難と絶望の中にいた被爆者などを犠牲にしてすすめられたのではないのでしょうか。

第三に、広島市の「平和都市思想」の問題です。米国は、広島と長崎への原爆投下が、アジア・太平洋戦争の終結を早め「平和」を導いたとして、核兵器の使用を「正当化」しています。このことは、米国による近代的な科学技術の成果である「原子力」の「平和利用」、すなわち原発をすすめていくことにつながっていきます。「原子力の平和利用」を認め、近代的な科学技術による「平和と繁栄」を求める戦災復興は、災害列島日本に多数の原発を建設し福島原発事故につながる問題を潜在していたのではないのでしょうか。

第四に、核兵器や原発をつくりだした近代文明を超える手がかりとして、日本国憲法が位置づけられます。憲法は、国際平和主義と人格権、生命の本質と生の持続可能性、そして自己決定権などの人間観、世界観を有しているからです。

◇ワークショップ「炭鉱と原爆の記憶——文化運動・被爆朝鮮人・遺構から考える」報告

## 一九五〇年代原爆の図巡回展と炭鉱文化運動

岡村 幸宣



一九五〇年代の「原爆の図」全国巡回の契機は、九州からの展示依頼であった。丸木位里・赤松俊子（丸木俊）夫妻は一九五〇年一〇月、広島展に続いて福岡県の志免炭鉱で九州最初の展覧会を行った。志免炭鉱は戦前に海軍によって開設、戦後に運輸省に移管されており、正式名称は日本国有鉄道志免炭業所。展覧会は国鉄労組志免支部が主催した。観客がどのように「原爆の図」を観たのかという資料はないが、全国巡回のはじまりに、炭鉱が関与していたことは記憶したい。

「原爆の図」展の資料や感想がまとめられていくのは、一九五一年七月の京都大学同学会主催「総合原爆展」以後のことで、その影響を強く受けた北大の若手研究者や学生たちによる北海道巡回は、一九五一年から五二年にかけて二度にわたって開催された。とりわけ五二年一月から五月にかけての第二次巡回は全道三二か所で開催され、美唄市の郷土史研究者・白戸仁康は、展覧会の呼びかけルートは全北海道労働組合協議会（全道労協）と民主主義科学者協会（民科）であったと推測する。その全道労協の中心となっていた強力な労働組合のひとつが、日本炭鉱労働組合（炭労）であった。

現在の視点から考えれば、炭鉱と原爆をつなぐ問題点として、エネルギー資源（石炭から原子力発電へ）や、朝鮮人徴用工（丸木夫妻は一九

七二年に原爆の図第一四部（からす）で朝鮮人被爆者を描いている）などが想起されるが、当時の来場者の感想には、直接そうした問題に言及している内容は見出せない。それでも、『北海道原爆展ニュース』（民科札幌支部編、一九五二年二月二五日）に掲載された夕張展の「市民の声」には、二〇歳の男性による「自分は坑内夫だが、炭鉱夫にも人間としての魂はある」と、被抑圧者としての共感が伝わる言葉がある。また、同じ紙面には「原子力の平和的応用」として、科学的知見から未来のエネルギーへの期待が語られている。

巡回展を担った関係者の証言では、炭鉱を中心にまわったのは、労働組合のネットワークが強固で観客を動員しやすい環境が整っており、待遇も良かったというのが最大の理由だったようだが、残された資料からは、内在していた問題の断片を見いだすことができる。

一九五五年五月には、戦時中に中国人蜂起が発生した花岡炭鉱のあった秋田県大館市で「原爆の図展」が開催されているが、その問題意識については十分な調査ができておらず、今後の課題としたい。

## 炭鉱と原爆をつなぐ——雑誌『辺境』を視座に

奥村 華子

本報告は、一九七〇年代の「炭鉱」と「原爆」を架橋することで、在日朝鮮人被爆者を問題化する試みである。朝鮮人被爆者が／を語ろうとする時、起点はそもそもなぜ広島や長崎に居合わせなくてはならなかったかということに据えられる。その際、被爆以前の出来事として、炭鉱での徴用の記憶が想起されることがある点はずで指摘される。本報告では、朝鮮人被爆者の問題が浮上し始める一九七〇年代において、閉山期にある炭鉱との関わりの中で在日朝鮮人被爆者を取り上げた言説として、雑誌『辺境』（豊島書房、のち第三号から辺境社発行）に掲載された



朴壽南による記事に着目した。

『辺境』は、井上光晴が編集にあたり、一九七〇年から八九年にかけて、三期に分けて断続的に発行された季刊誌である。上野英信や森崎和江などが連載し、各々によって商業ジャーナリズムとは異なる問題提起が探られており、その中では「原爆」と「炭鉱」という問題領域が併置されている。な

かでも在日朝鮮人二世である朴壽南による「途上の夢」、『辺境』第二次三号、一九七五年）は、一般的な「証言」の記述とは異なり、「証言」と「証言」の境界のあわいをあえて曖昧に、コラーージュする。朴自身の先行する著作である『朝鮮・ヒロシマ・半日本人』（三省堂、一九七三年）において数多の在日朝鮮人の半生を聞き取ってきた自身の旅路を媒介にかつての被爆以前の徴用の場としての炭鉱を、基町再開発事業によって消えゆく〈原爆スラム〉と閉山期を迎える炭鉱という現在の場とつないでいく。時代も場所も異なる記憶がつながれることで、施設群の撤去により在日朝鮮人固有の記憶を語る場が消えゆくことへの抗いが描かれている。在日朝鮮人二世である朴において「原爆」と「炭鉱」の経験が併置されることは、一九七〇年代において、いまだ解消されえない戦後の問題を、在日朝鮮人固有の総体的な記憶として物語る行為として行われたものだったといえるだろう。

報告後の質疑では多くのご教示を受けたが、特に印象的だったのは問題をより広く拓いていただくような問いを受けたことだった。「炭鉱」と「原爆」という新たな視点をいただいたことに改めてお礼を申し上げるとともに、今後は原爆をめぐる言説のコンテクストを広く精査し、朝鮮人徴用と炭鉱の接点をより明確に問題化できるよう努めることを展望としたい。

## 遺構を通して考える〈炭鉱〉と〈原爆〉

木村 至聖



長崎港の沖合にある端島（通称・軍艦島）は、二〇一五年、「端島炭坑」として、「明治日本の産業革命遺産 製鉄・製鋼、造船、石炭産業」というタイトルのもとユネスコの世界遺産に登録された。文化庁の説明によれば、本資産は非西洋における産業化の「成功」の記念碑であり、日本の産業国家への道程を証言する遺産として「顕著な普遍的価値」を持つとされている。しかしながら、こうした意味づけは、端島（軍艦島）の実に多面的な魅力を、「明治」における近代化への貢献（の一ピース）にまで切り詰めてしまうものである。

本報告では、こうしたことを踏まえて、遺構を通して過去の出来事について語ったり、記憶を継承したりすることの可能性と課題について考えた。

そもそも遺構というものは、過去の建築物や構造物の一部あるいは全体が何らかの理由で残ったものである。それは必ずしも誰かが意図的に残したものと限らず、またその残り方も誰かに意図されたものとは限らない。それゆえに、遺構はただ漠然とそこにある環境にすぎず、何を語るわけでもない。文化遺産という制度は、こうした遺構に特定の立場から特定の意味づけを与え、意図的なたちでその姿を残そうとするが、文化遺産となった場合でさえも、遺構はその制度化された意味・価値を超えて私たちの〈想像力〉に訴えかけてくるのである。

こうした〈想像力〉の働きは、たとえば文学や芸術においては、国の政策や資本の論理といった巨大な力に翻弄される存在としての「労働者」

や「被爆者」に声を与え、あくまでも彼ら／彼女らの生活世界から見えるものを豊かなりアリティを持って現前させるものであった。それはむしろ実証的なデータに基づく事実の連関というよりは（言うまでもなくそれも重要だが）、そのような実証的データが不足するなかでも、人々が過去の出来事に学び、考えを深める上で重要な役割を果たす。遺構もまた同じように人々の〈想像力〉を喚起させるものだが、特定の場所に規定されているがゆえに、たとえば炭鉱と原爆のように二つのトピックを関連づけることは実際には難しい。この点が、遺構の喚起する〈想像力〉の限界ではある。

これに対しては、視点を「地域」に広げ（たとえば長崎など）、一見異なるトピックに属する遺構どうしを相互に関連づけること、それはつまりその遺構が喚起する〈想像力〉どうしをさらに〈想像力〉によって架橋していくことである。たしかに遺構そのものはこのようなメタレベルの〈想像力〉を持たないかもしれないが、それはたとえばガイドの説明や、あるいは文学、芸術による〈想像力〉の助けも借りることによってある程度可能となるものだろう。

## 彙報

### 第五六回 原爆文学研究会

○日時 二〇一八年七月二十八日（土）

○会場 神戸市センタープラザ一七号会議室

○研究発表

憲法の間観と災害（核被害）

池田 清

○ワークショップ「炭鉱と原爆の記憶 —— 文化運動・被爆朝鮮人・遺構から考える ——」

司会 楠田剛士

報告1 一九五〇年代「原爆の凶展」と炭鉱文化運動

岡村 幸宣

報告2 炭鉱と原爆をつなぐ ——

雑誌『辺境』を視座に

奥村 華子

報告3 遺構を通して考える〈炭鉱〉と〈原爆〉

木村 至聖

## 編集後記

台風直撃が懸念される中、ぎりぎりの判断として二日目の中止に踏み切った第五六回原爆文学研究会。結局、翌朝は、ときおり小雨が降る程度の穏やかな天候でした。駅のホームから空を見上げつつ、これなら開催できたかもしれない、いや、しかしそれは結果論で、ひとつ間違えば暴風雨に巻き込まれていた可能性もある……と、地下街のサイゼリヤで緊急開催された世話人会を思い起こしながら、判断の難しさをかみしめました。

さて、今号の中野和典さんによる巻頭エッセイは、前号の松尾直美さんの回想を受けて記された統編のような内容です。ぜひ、前号とあわせてお読みいただき、時間を超えて鳩がもたらした小さな物語をお楽しみください。

次回の第五七回原爆文学研究会は二月二二日（土）、二三日（日）の二日間にわたり、九州大学西新プラザ大会議室にて開催されます。中尾麻伊香さん、金文柱さんの研究報告、吉本隆明『「反核」異論』再読、山代巴のセッション、その他ワークショップなどの企画を予定しています。みなさまのご参加を心よりお待ちしております。（岡村幸宣）

発行元 原爆文学研究会事務局

〒八一四一〇一八〇 福岡市城南区七隈八一一九一

福岡大学人文学部 中野和典研究室内

tel:092-871-6631（代表）/e-mail:nakanok@fukuoka-u.ac.jp

URL <http://www.genbunken.net/>